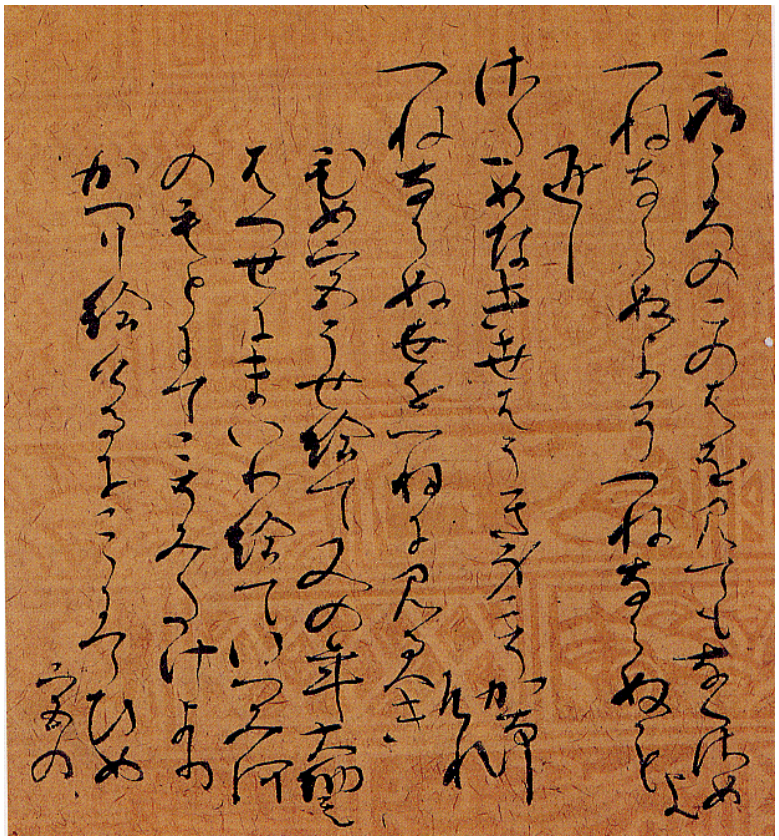
第 121 回貴重書展

光彩陸離-平安文学の意匠-



鶴見大学図書館

平成 20 年 11 月 28 日（金）～ 12 月 20 日（土）

紫式部学会後援

目録

＊＝個人蔵

Ⅰ　料紙さまざま

1　定頼集断簡　伝藤原定家筆　四条殿切　江戸時代初期写　軸装1幅
2　源氏物語抜書　伝近衛信尋筆　花宴　江戸時代前期写　巻子本1軸
3　狭衣物語断簡　伝阿仏尼筆　鎌倉時代後期写　軸装1幅
4　大鏡断簡　伝尊円親王筆　巻物切　南北朝時代写　軸装1幅
（参考）田中親美制作　写経用装飾料紙　巻子本1軸＊

Ⅱ　表紙のデザイン

5　伊勢物語　高倉永雅筆　江戸時代末期写　列帖装2冊
（参考）伊勢物語　天明7年（1787）刊　型押し文様表紙　袋綴2冊＊
6　源氏物語　龍紋刷外題升形本　江戸時代前期写　列帖装54冊
7　狭衣物語　江戸時代前期写　列帖装3冊・折本1冊
8　和漢朗詠集　鎌倉時代初期写（横浜市指定文化財）　巻子本2軸

Ⅲ　雲紙と墨流し

9　古今和歌集断簡　伝藤原為家筆　北野切　鎌倉時代中期写　台紙貼1葉＊
（参考）源氏物語筆者目録　古筆了音筆　正徳2年写　結綴　1冊
10　源氏物語抜書　紅葉賀・花宴　伝青蓮院尊応筆　室町時代後期写　軸装1幅
(参考)琵琶引　化仍筆　文禄4年写　折本1冊
11　源氏物語小鏡　小堀鞆音旧蔵　江戸時代前期写　巻子本1軸＊
（参考）古今和歌集仮名序　色変わり装飾料紙　江戸時代中期写　巻子本1軸＊

Ⅳ　金銀の輝き

12　猿丸大夫集断簡　伝藤原公任筆　平安時代後期写　軸装1幅
13　拾遺和歌集　江戸時代前期写　列帖装2冊＊
14　源氏物語　　江戸時代前期写　列帖装12冊
15　源氏物語系図　江戸時代前期写　折本1冊
（参考）類字名所和歌集　江戸時代前期写　列帖装8冊

会期：平成２０年１１月２８日（金）～１２月２０日（土）

鶴見大学図書館

紫式部学会後援

永遠の古典、極上の装い

今年は『源氏物語』1000年紀とやら、普段古典文学を振り返ってくださらない方々も、講演会だの展覧会だのとこぞってお出かけ、これぞ天下太平の祥瑞でありましょう。ちっとも読まれないのに評判だけは高く、うわさ話の花を咲かせ続ける古典文学とは一体なんだろう、と首をかしげたくなることのそれはそれとして、いつも年度最後の貴重書展は、源氏物語研究所がお引き受けすることになっていますが、はやっていることに背を向けたくなる結構な性分ゆえ、『源氏物語』を主題とはせず、また文学性を正面に立てることなく、書物の外形や料紙、つまり意匠に照明を当ててみることとします。

源氏物語研究所の最大の仕事は、あらゆる研究の基盤であり、未来へしっかりと継承すべき財産であり、有効な教育手段でもある古典籍の収集です。限られた予算をやりくりしながら、忘れられそうな書物の意義を再確認し、稀には掘り出し物に狂喜して、独自性豊かな蔵書を形成してきました。一見高級そうな文学論も、当節流行のしゃれた言説も、多分数年で読まれなくなるものばかりと申して大過ないでしょうから、古典籍のいのちの長さに比べれば、誠にはかなくむなしい話です。

さてその古典籍ですが、本の意匠について「それは外側の形式であって内容と関係ない」とか「書物のかたちに何の意味がある」とか言われる方が、よくいらっしゃいます。しかし、ひとの衣裳は人格・趣味・育ち方まで暗示 ── 時に明示 ── しますし、また大切な方への手紙に便箋を吟味し、心をこめた贈り物には包装も選ぶのが、自然な心の働きでしょう。書物の意匠も同じです。それぞれの古典に似合いの衣裳を用意した、古人の思いと工夫を見落としてよいはずはありません。

と言うような理屈は、実はどうでもよろしいのです。美しくて、洒落ていて、豪華で、風格ある古典籍の意匠を楽しんでいただければ、準備の苦労も雲散霧消するのですから。なお、展示充実のために本学教員所蔵の資料を借用しました。各位の御協力を感謝します。

平成戊子黄鐘下浣

文学部教授　高田信敬

解題　　＊＝個人蔵

Ⅰ　料紙さまざま

大切な書物のために筆や墨を選び美しい紙を用意する、それは大切なひとへ手紙を書く場合と同じです。魅力ある作品を一層魅力的にする心くばりのきいた典籍を、料紙の面からお楽しみください。

1　定頼集断簡　伝藤原定家筆　四条殿切　江戸時代初期写　軸装1幅

茶色地に青海波・格子等の文様を刷り出した蝋箋（縦１６．８、横１５．５糎）。古筆切の料紙としては例の少ない部類に属する。左下がりに１０行書写、右端には綴じ穴跡が残り、丁のオモテ面であることが判明する。加賀前田家旧蔵、尊経閣文庫を経て出光美術館の所蔵となった『定頼集』のきわめて精巧な模写本であり、これもやはり前田家に伝来していたが、昭和の初年に分割された。切名は、藤原定頼（９９２～１０５４）を四条中納言と呼んだことによる。

掲出断簡のもととなった出光美術館本『定頼集』は、楮素紙・銀切箔散らし薄様・墨流しなど不揃いの料紙を使い、ありあわせの紙に書写した定家常用の典籍と言う印象がある。一方掲出の断簡は、江戸時代には比較的珍しい蝋箋で統一され、特殊な製作意図をうかがわせるに足る。最も新しい時代の名物切である。四条殿切分割以前の状態についてほとんど知られていないけれども、近衛家陽明文庫所蔵『大手鑑』の古筆切覆輪に同種の蝋箋が相当数用いられていることは、十分注意されてよい。

2　源氏物語抜書　伝近衛信尋筆　花宴　江戸時代前期写　巻子本1軸

茶地に紅葉・鹿等を織り出した金襴表紙（縦２９．３糎）、外題なし。金布目紙見返しに筆者が近衛信尋であることを記した小紙片を貼る。白具引き斐紙を布目打ちし、遠山・水辺・松・秋草等の金泥下絵の全１０紙に、おおらかな近衛流の散らし書き。花宴巻冒頭部分から抄出、巻末に和漢朗詠集巻上子日２９・３１・３２を写す。所々に細かな銀箔を蒔き、料紙を一層品よく仕上げている。

伝称筆者近衛信尋（１５９９～１６４９）は後陽成天皇第４皇子、近衛信伊に嫡子がなかったためその養子となり、関白従一位に至る。養父譲りの闊達な書風を得意とした。掲出本はいかにも信尋らしい雰囲気を備えているけれども、若干下った時代の別筆と見ておくのが穏当なところであろう。近衛流は江戸時代を通じて人気が高く、謡本をはじめさまざまな典籍書写に用いられた。元禄11年(1698)には、定家流・光悦流とともにこれを学ぶための手本『三家筆法消息』も出版されたほどである。

掲出本は相当自由な抄出を行っており、たとえば冒頭部「やよひのはつか藤の花のえんに桜二木をくれたるいとおもしろきに」に対応するところ、『源氏物語』本文では「やよひの廿余日右大臣のゆみのけちにかむたちめみこたちおほくつとへ給てやかてふちの宴したまふ…をくれてさくさくらふた木そいとおもしろき」となっていて、『源氏物語』そのものではなく、梗概書『源氏大鏡』の類を用いた可能性も考えられる。

３　狭衣物語断簡　伝阿仏尼筆　鎌倉時代後期写　軸装1幅

金銀砂子蒔き斐紙（縦１５．３、横１５．０糎）に巻４を１０行書写、狭衣大将が宰相中将妹に語りかける場面である。原態は升形本列帖装。古筆別家了仲の極札「四条局阿仏ぅくうに　〔守村〕」を付し、国宝手鑑『翰墨城』所収のツレも伝称筆者を阿仏尼とするので、伝二条為明筆として分類する説（古筆学大成）はいかがかと思われる。掲出の断簡は女筆の雰囲気を持った柔らかい手、伝二条為明筆のほうはもっと力強い別種の切である。本文は諸本と異同が大きい。

「源氏狭衣」と併称されるだけあって、『狭衣物語』断簡は、古筆切中にかなりの断簡が見られる。ついでに物語の古筆切についてふれておくと、『伊勢物語』・『源氏物語』・『狭衣物語』の断簡でそのほとんどが占められ、他には『栄花物語』がいくらか見られる程度、これら以外の作品は非常に少ない。掲出の切は決して派手ではないが、気品高く美しいもののひとつ。『新撰古筆名葉集』阿仏尼の項に「六半　砂子紙　源氏コノ外類切多シ　四寸九分」に相当する。平成６年学園創立七〇周年の記念展示準備中、故酒井宇吉氏のご配慮により当館へ譲られた資料であることを付記しておく。

４　大鏡断簡　伝尊円親王筆　巻物切　南北朝時代写　軸装1幅

雁・霞・葦手等の金銀泥下絵ある斐紙（縦３０．３、横６２．１糎）に、『大鏡』巻６昔物語より鶯宿梅の佳話を散らし書き抄出する。巻物皺が見られるので、原態は巻子本。箱蓋裏に畠山牛庵の極札「青蓮院尊円法親王木にこれ　〔牛庵〕」を貼る。尊円親王（１２９８～１３５６）の筆跡とは認められない。しかし堂々とした書きぶりと料紙装飾は、南北朝の特色を示す。

鎌倉時代から南北朝にかけて、さまざまな装飾のある大型巻子本に『源氏物語』『狭衣物語』などを抄出し、調度手本とする作例はかなり残されているが、掲出断簡のように『大鏡』を写すものは珍しい。後述『大手鑑』所収断簡の他、数点伝存するのみであろう。なおこれらの大型巻子本は、伏見院流・青蓮院流など宸翰様を基本とする書風によるのが普通である。本文は「御覧へけれは」の箇所が最善本とされる東松本と同じ。伝本としては古い部類に属しており、研究上価値が高い。近衛家陽明文庫の『大手鑑』にもほぼ同時代書写の『大鏡』巻子本断簡が収められ、やはり尊円親王の極めを持つ。紫・藍の内曇斐紙に銀泥下絵の大型巻子本断簡もある（南園文庫）。

（参考）田中親美制作　写経用装飾料紙　巻子本1軸＊

薄茶地に花菱を刷り、金銀箔・野毛・霞引き等の多彩な技法を駆使した紙表紙（縦２５．０、横２２．７糎）、黄・緑・青等５色の料紙を継ぐ。天地及び縦に金界（高さ１８．１、幅１．７糎）を引き、その欄外は手書きの桜花下絵。ウラ面にも具引き・優美なぼかし・雲母刷りの美しい下絵があり、両面にわたる丁寧かつ華麗な装飾が見事である。

制作者田中親美（１８７５～１９７５）は古筆の鑑定に優れ、自らも書と絵とを善くし、『紫式部日記絵巻』『平家納経』などの複製に前人未踏の足跡を残した。肉筆模写・木版

下絵・箔装飾を自在にこなした複製類が、美術史・国文学もたらしたものは非常に大きい。良質な典籍を多く所蔵したことでも知られている。
掲出本がオモテ・ウラ両面に秀抜な装飾を施しているのは『平家納経』に倣い、ウラ面の雲母刷りは西本願寺本三十六人集の下絵を参考としたのであろう。単なる写経料紙の域を超え、一個の工芸品として評価しうる名作である。紅のぼかしと兎の雲母刷りをご鑑賞いただきたい。掲出本は、田中親美を経済的に支援した原三渓・益田鈍翁らへ、節目ごとの挨拶代わりに贈呈された資料のひとつ。その他に田中翁は色紙・短冊等の装飾料紙も適宜作成し、配りものとしていた。

Ⅱ　表紙のデザイン

表紙はもっとも人目につくところ、いわば書物の顔です。入念な、あるいは意表をつく趣向の装いは、書物によせる古人の深い思いを語っています。

5　伊勢物語　高倉永雅筆　江戸時代末期写　列帖装2冊

萌葱色地に雲立涌・織田木瓜を織り出した緞子表紙（縦２４．５、横１８．１糎）は、原装。表紙中央に濃紫絹地題簽(縦17.0、横4.0糎)を押し、「伊勢物語　上(下)」と墨書、金泥・金切箔の豪華な外題である。赤香色地に金泥瑞鳥下絵・金箔散らしの見返し、本文は厚手斐紙、毎半葉8行18字程度書写。墨付、上37丁・下51丁。遊紙各冊前1丁・後2丁。武田本系本文に依拠したものであろう。書き入れ・校合・蔵書印等もない。
外題近衛内大臣（忠熙、１８０８～１８９８）・本文高倉中納言（永雅、１７８４～１８５５）と極めた筆者目録あり。それぞれ極めの通りの書き手と認められる。 嫁入り本あるいは調度手本として作られたらしく、表紙文様の織田木瓜から想像すれば、この家紋を持つ家の婚儀にあわせて調進されたものであろうか。制作当時の状態のまま、ほとんど損傷なく伝えられた美麗な典籍である。

(参考) 伊勢物語　天明7年(1787)刊　型押し文様表紙　袋綴2冊＊

遠山に雲、雁金の群れ、近景には薄を型押しした藍色紙表紙（縦２５．８、横１８．４糎）。元禄１４年（１７０１）版を天明７年（１７８７）に再刊したもの。銭屋庄兵衛板の刊記を持つ版と書肆名のない版とがあり、掲出本は後者。下河辺拾水子の繊細な挿絵も見所の一つ、展示箇所は布引の滝の図である。
江戸時代版本の表紙に幾何的な型押し文様を施した例はいくらも数えられるが、大和絵の風情を描き出し、しかも一見すると何もないように仕立てられた小粋な装飾は、珍しい。是非眼を凝らして御覧あれ。

6　源氏物語　龍紋刷外題升形本　江戸時代前期写　列帖装５４冊

薄藍色の鱗形・市松・七宝繋ぎ等を刷った紙表紙（縦１５．４、横１５．５糎）に、各冊図柄を変えた金銀泥装飾を施し、洗練された味わいの装丁である。表紙中央に龍形を摺りだした題簽（縦10．0、横2．9糎）を押し、定家様の筆跡で巻名を墨書。見返しは、銀切箔を密に蒔いた瀟洒なものが多いが、稀に金銀泥霞引きもある。数人の寄合書、奥書・識語の類はない。若菜下巻末に檀紙を貼り、古筆家の手で藤裏葉・若菜上・若菜下の3帖が一条院尊覚（1608～1661）の筆であるとする。しかしほぼその時代の書写にかかる典籍ではあっても、尊覚とは別人の手になると思われる。本文と同筆の墨校合若干。青表紙本系統の本文を持ち、桐壺・若紫は三条西本にごく近い。空蝉・若紫・花宴・浮舟の4帖を展示する。

7　狭衣物語　江戸時代前期写　列帖装3冊・折本1冊

薄茶地瑞雲文様の金襴表紙（縦２３．５、横１６．６糎）。第３冊後表紙のみ無地の絹表紙とするのは、湿損を蒙った原表紙の取り替えであろう。表紙中央に紅地金泥草花下絵題簽（縦13．9、横2．8糎）を押し、「狭衣大将　春（夏・秋冬）」と墨書。第3冊の表記が異例なのは、元来「秋」とあったものを「秋冬」と書き換えたゆえであることが、題簽地紙の荒れから推測される。内容は全4冊の内最終冊を欠く「秋」までの3冊が現状、これをあたかも揃い本のように見せかけるべく、つまり第3・4冊相当分が備わっているかのように、題簽を加工したのであろう。見返し、金箔散らしの斐紙。系図は折本とし、題簽を欠く。物語本文と系図とは別筆、系図の筆者は外題の書き手と同じらしい。

本文毎半葉10行20字程度、同筆のイ本校合・補入等あり。和歌1首2字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。元和9年（1623）心也刊の古活字版と同系本文。個性的な色彩感覚の装丁であるものの、全体に水濡れの跡があって、やや美観を損ねている。本文3冊の表紙と、系図冒頭部分を展示した。

８　和漢朗詠集　鎌倉時代初期写（横浜市指定文化財）　巻子本2軸

金茶地に金銀糸を用いて花木を織り出したモール表紙（高さ３０．２糎）、外題なし。金銀切箔蒔き・霞引き斐紙の見返しは、異国的な雰囲気の表紙と共に、おそらく江戸時代初期以来の形をとどめるものであろう。本文料紙、斐楮混漉き。上巻３８紙・下巻３６紙、１紙あたりの寸法は概して下巻の方が長い。上下巻で字の大きさの異なるところもあるが、全巻１筆と考えたい。天地に淡墨界（界高２５．９糎、縦罫なし）を引き、漢詩１行１４字程度、和歌１首２行書き、上巻では和歌の２行目を２字下げとすることがしばしば見られる。なお和歌を２行に書写する場合、通常各行がそれぞれ上句・下句に対応する。しかし掲出本では、「千とせまてかきれるまつもけふ／よりはきみにひかれ（「て」脱）よろつよやへん」（子日３２）の如く、改行と句切の一致しない個所があり、鎌倉時代の早い頃までの様式を示す。料紙の痛み・内題のないこと等から、上巻首部に総目録も含めた若干の欠脱が想定される。

伝称筆者後京極良経（１１６９～１２０６）にふさわしく、後京極流の力感あふれる書。良経の筆跡ではないにせよ、いかにも鎌倉時代らしい名筆である。上巻のすべてと下巻の冒頭に朱墨の書き入れあり、朱はかなり詳細で紀伝点、菅家の訓を伝えるか。墨は声点・作者名・詩題等の注記、片仮名傍訓少々。本文は、立春３の次に霞７８を重出、歌序の異同（草４４１・４４２・４４０、無常７９６・７９８・７９７）、竹４３６の前に「よにふれは」１首を増補する他、字句の異同若干。堀部正二『校異　和漢朗詠集』に紹介された世尊寺行尹本・嘉暦本に近いようである。

古筆家初代了佐（１５７２～１６６３）の折紙が付属し、その文言に「已上／這　和漢朗詠集上下者／後京極良経公真跡／無紛者也　応御所望／証之而已／承応二暦三月上旬古筆了佐〔琴山〕（花押）／打它十右衛門殿」とある。打它十右衛門は江戸時代初期の京都の豪商、糸屋と号した人物で、名を公軌と言う。木下長嘯子・松永貞徳、あるいは蒔絵師山本春正とも交渉があった。ちなみに『中院通茂日記』貞享元年（１６８４）１１月１９日条「絵本打它十右衛門所持信実絵也持参了」の「信実絵」は藤原定家の画像であり、現在冷泉家の所蔵となっている。

中近東風デザインの表紙は舶載のモール（莫臥爾）地、古典籍の装丁に用いられた例は稀であろう。打它公軌の時代に作られたと思われる豪華な高蒔絵箱に収納する。筆跡・装丁・伝来旧蔵・箱いずれも価値のある書物、上巻の初めを展示した。

Ⅲ　雲紙と墨流し

ともに平安時代から始まった、息の長い装飾技法です。和歌の書写料紙・物語を書き抜きした調度手本にしばしば使われています。金銀の下絵や箔蒔きと併用し、豪華さのきわだつ作例もあります。

９　古今和歌集断簡　伝藤原為家筆　北野切　鎌倉時代中期写　台紙貼1葉＊

天地に藍の雲を漉いた斐紙（縦２２．５、横１６．３糎）に金銀切箔散らしの覆輪を施す。巻５秋下３９２（歌）・３９３（詞書）を７行に書写、ただし左右両端に各１行の削去跡が見られ、元来毎半葉９行の列帖装冊子本であったと思われる。銀箔蒔の極札「為家卿　わ

ひ人の　〔琴山〕」（オモテ）、「北野切　乙亥　〔了延〕」（ウラ）を添える。「乙亥」は宝暦５年（１７５５）であろう。
掲出の北野切は、筆跡の優秀さと品の良い料紙とによって、鎌倉時代書写の古今集古筆切中屈指の評価を得ており、掲出の断簡のように藍内曇料紙と白紙のものとがほぼ同数伝存する。内曇は原則的に紙の片面にのみ装飾として施されるものであるから、１枚の料紙の両面を使って書写すれば、内曇のある面とない面とが等しく出てくるのに不思議はない。ここで注目すべきは、天地水平方向に藍の雲がたなびいていること。普通内曇料紙を冊子本に仕立てた場合、左右いずれかの端に縦方向の雲が入るゆえである（その理由を考えてみてください）。つまり北野切は、その書写にあたって特別に漉いた料紙を用意したらしく、制作者の深い思い入れが看取出来よう。

(参考)源氏物語筆者目録　古筆了音筆　正徳2年写　結綴　1冊
天藍・地紫の雲紙を折り紙（縦１８．９、横５１．５糎）とし、水引で綴じる。毎半葉１２行、内題「源氏物語筆者目録」。末尾に「正徳二年／季冬中旬　古筆了音〔琴山〕」の奥書、中山篤親以下の寄合書き源氏物語（当館蔵）に付属する資料である。了音は古筆家歴代中目利きの評が高かった人物、目録には「外題并筥蓋引出之銘書」の記述もあるので、元来は巻銘を蒔絵にした豪華な箱入り本であったと推されるが、現在箱を失い、表紙も変えられていて外題を欠く。内曇り料紙を用いた立派な目録からすれば、大名あたりの婚礼に用いられた典籍かと想像される。

10　源氏物語抜書　紅葉賀･花宴　伝青蓮院尊応筆　室町時代後期写　軸装1幅
藍と紫の内曇斐紙（縦３３．５、横４９．５糎）に柳・牡丹・蝶・霞等の下絵を金銀泥にて描く豪華な料紙使用。箱に加賀前田家旧蔵の貼紙あるも、その実否を確認できない。現在１紙分のみ残るが、制作当初は大型巻子の贅沢な調度手本であったろう。紅葉賀巻より「からひとの」の歌、花宴巻より朧月夜との出会いの場面を書き抜く。
伝称筆者の尊応准后（？～１５１３）は二条持基の子、青蓮院門跡・天台座主を務め、後十楽院と号した能書であり、その筆跡は後代に継承され、尊応流として一派をなした。尊応准后の書とは別筆と思われるが、同時代の作例と見てよい。他に伏見宮貞敬親王の息にして仁孝天皇の養子、南都一条院門跡となった尊応法親王もいるが、掲出資料の筆者には時代的にふさわしくない。嘉右衛門および古筆了信の極札あり。

(参考)琵琶引　化仍筆　文禄4年写　折本1冊
表紙なし。厚手斐紙を毎半葉３行書写用に折り（縦３５．４、横１１．２糎）、白界４条を引く。天地に藍・紫の雲を漉き入れ、さらに金銀泥下絵装飾を施した豪華な料紙である。末尾に「文禄四年二月下旬　八十化仍書之」の書写奥書、筆者化仍については未勘。闊達な書と力のある料紙意匠は、いかにも安土桃山の気風を感じさせる。
本文は版本系流布本ではなく、より白居易の原典に近いとされる旧鈔本系であり、伝統的なテキ

ストに依拠したと思われ、この点でも興味深い書物である。

11　源氏物語小鏡　小堀鞆音旧蔵　江戸時代前期写　巻子本1軸＊

大振りの墨流し斐紙（縦３４．４、横約６３糎）６枚継ぎ、巻子本とする。巻首に「鞆音蔵」の朱文印あって、小堀鞆音（コボリトモト、１８６４～１９３１）の旧蔵を示す。鞆音は歴史画の名手として名高く、考証の資料として様々な古典籍を集めていた。蔵書の多くは、現在國學院高等学校の所有。掲出本は『源氏小鏡』を書写内容とし、超絶技巧を展開した墨流し技法が魅力的である。

長大な物語の全体を手軽に見渡せるよう抄出・摘録された『源氏小鏡』は、簡便な梗概書として多様されたゆえに、伝本の種類も数も非常に多い。掲出本は古本系の一本と思われるが、夕顔・若紫・末摘花のみの零本。展示箇所は、夕顔と光源氏が和歌を詠み合う場面である。

(参考)古今和歌集仮名序　色変わり装飾料紙　江戸時代中期写　巻子本1軸＊

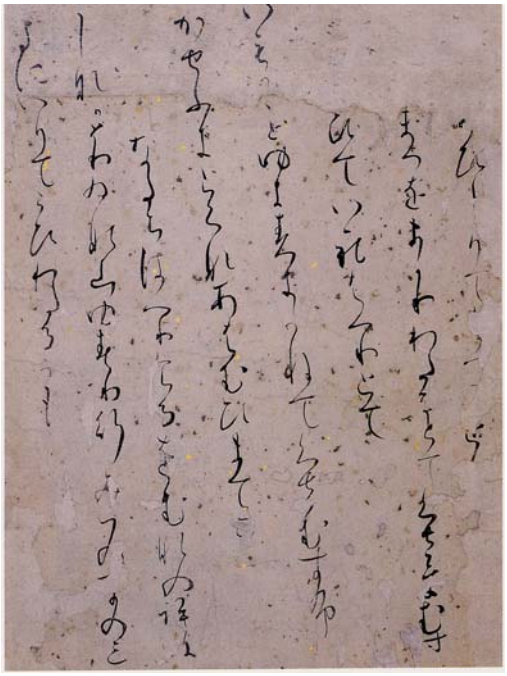
大振りの蝋箋風装飾料紙（縦３５．４、横４８．３糎）９枚継、海松色羅表紙（幅１３．７糎）を付し、軸は紫檀。見返しは縹色地に金揉箔散らし、大振りの定家様にて古今和歌集仮名序を書写する。

布目地に木版下絵の各料紙は１紙ごとにすべて文様と色とを変え、しゃれた雰囲気の書物となっている。展示箇所は、墨流しを雲母と薄藍で表現した部分である。

Ⅳ　金銀の輝き

絢爛豪華の極みは、なんと言っても金と銀でしょう。卓抜にデザインされた金銀は、成金趣味の嫌らしさからほど遠く、むしろ古典籍に品の良さ・高雅な美麗さを添えるものです。銀は黒く変色やすく、現状では渋すぎる印象ですので、作られた当時の輝きを想像してみてください。

12　猿丸大夫集断簡　伝藤原公任筆　平安時代後期写　軸装1幅



掲出の断簡では伝称筆者を藤原公任（９６６～１０４１）とするが、藤原行成（９７２～１０２７）の筆とも極めらる私家集の名品。薄藍色地に金銀の細かい箔を散らし、品格高い仮名が映える。類似の料紙は藤原伊房筆藍紙本万葉集・伝藤原伊経筆尼子切に用いられており、いずれも１１世紀後半の書写と推定。ツレは１０葉程度知られ、そのほとんどが上部に損傷を持つ。欠けた部分の補写はきわめて巧妙、腕の確かさが見て取れる。『猿

丸大夫集』の最も古い本文資料である。
『猿丸大夫集』は、その前半が万葉集を主体とする古歌、後半は古今集から多くの歌を取る雑纂歌集で、個人の集ではない。通説では書陵部甲本・西本願寺本を含む第１類と、書陵部戊本・歌仙家集本等の第２類とに分かれ、掲出断簡は第１類西本願寺本に近い。詞書中に「侍り」を多用するのが特徴のひとつである。１２世紀初めに制作されたと考えられる西本願寺本三十六人集より古く、国文学研究上も書道史的にも貴重な切。

13　拾遺和歌集　江戸時代前期写　列帖装2冊＊

重厚な唐草織り出しの金襴表紙（縦２５．８、横１８．２糎）、左肩に金銀泥下絵題簽（縦14．0、横4．0糎）を押し、「拾遺和歌集　上（下）」と墨書、本文とは別筆と思われる。見返しは厚手の金紙に卍繋ぎ。精良な斐紙に毎半葉10行26字程度、手慣れた書写。墨付き上96丁・下91丁、遊紙上前1丁・後3丁、下前1丁・後4丁。この表紙には、華やかさとは別種の、風格と落ち着きが見られる。
天福元年（1233）仲秋藤原定家奥書・「此本付属大夫為相」の為家識語によって系統は明らかであるが、巻１２恋２人麿「なき名のみたつの市とはさわげどもいさまた人をうるよしもなし」（７００）の第４句を「いまはた人」に作り「いさまた人イ」と傍書するところ、他に所見のない異同。異本系では「我おもふ人」であって、問題の多い箇所である。下冊最終括りに錯簡。

14　源氏物語　江戸時代前期写　列帖装12冊

紺地に金泥にて杜若等を描く紙表紙（縦２４．０、横１８．０糎）、左肩に表紙と図柄を揃えた金泥下絵白具引き題簽（縦12．8、横2．8糎）を押し、「絵合」以下の巻名を墨書。絵合・松風・藤袴・梅枝・藤裏葉・夕霧・御法・幻・橋姫・宿木・東屋・手習の12帖存、表紙絵は各巻の内容と対応せず、幾つかの型に従って製作される。たとえば藤袴と幻、夕霧と東屋は同一意匠である。おおむね青表紙本であるが、手習は河内本系本文の特徴を示す。
掲出本は、その表紙絵もさることながら、黄檗色地に金銀泥を手書きあるいは木版刷りした、装飾性豊かな見返しがおもしろい。南画風の山や団扇型などの思い切った表現は、江戸時代と言うよりはむしろ安土桃山の大らかさを感じさせる。現代の眼から見ても、十分斬新で個性的な意匠と評価しえよう。藤袴（山）・夕霧（麻の葉）・御法（団扇）・宿木の4帖を展示。

15　源氏物語系図　江戸時代前期写　折本1冊

白地に瑞雲・鳳凰等を織り出した金襴表紙（縦１０．１、横１２．５糎）、中央に金紙題簽を押し、「源氏物語系図」と墨書。金銀泥にて稲妻形に塗り分けた見返しはとても斬新な意匠であるが、銀のヤケによって墨の如く見え、当初の洗練された味わいを減じている。掌中の愛玩に堪える、しゃれた書物ではある。
全9折の両面に書写、ただしウラ面は第14折まで。本文は系図線を引かず人名を掲出、毎半葉10行、「太上天皇」から始まり「系図外之人」まで、奥書はないが三条西実隆本系永正9年本の類

であろう。巻首「太上天皇　あふひの巻に御位をゆつり／ており給さか木の巻にかくれ／給ぬ桐壺の帝也」の箇所を展示する。

（参考）類字名所和歌集　江戸時代前期写　列帖装8冊

紺地に金泥にて秋草・土坡等を描き、霞引きを加えた絢爛たる表紙（縦24．3、横17．2糎）、左肩に縹色金泥下絵題簽（縦16．2、横2．3糎）を押し、「類字名寄　一（～八）」と墨書、押発装あり。金地紗綾形文の見返し。各冊に目録を持ち、内題「類字名所和歌集第一（～八）」。本文料紙、斐紙。毎半葉10行和歌1首2行書きを原則とするが、稀に1行書きの箇所も見える。歌の上に集付、下に作者名を記す。

元和3年（1617）古活字版を最古伝本とする『類字名所和歌集』は、7巻8821首の大冊であるが、掲出本はこれを抄出したもので、巻 1 で言えば元和本1034首から332首を採用する。また元和本巻6に相当する部門を嵐山～紀伊海と弓槻嵩～白河に分割し、全体を8冊に仕立て、見栄えのよい形とする。その底本は、元和3年古活字版ではなく杉田勘兵衛刊の整版本かもしれない。

上質の斐紙を用い、豪華に装丁した所謂嫁入本。蓋に「類字名寄」の金泥文字のある塗箱に収める。

＊解題は高田が担当しました。倉卒の間の作成ですので、誤りも多いかと存じます。ご示教をお待ちしております。